



# 日本映画復権の一翼担うエンジェルたち

いかに作り、いかに売るか。企画の実現性と質の高さ重視  
 “商品”としてどう観客に届けるのか!? 本当の競争が始まった

6回目の受賞者が決まった角川出版映像事業振興基金信託主催「日本映画エンジェル大賞」(協賛・財団法人角川文化振興財団)。

応募作品は全体的にレベルの高い企画と表人的発想の企画に二極化したようだ。審査は毎回試行錯誤を繰り返しているが、今回は企画の実現性に重点を置き、また作品としての質の高さも重視しながら、応募者がその作品をどのような商品として消費者(観客)に届ける事を考えているかも審査対象とされた。大賞は楠本秀一「贈り物」(監督: 柴田 大輔)、「東京即売会襲撃II(仮)」(監督: 高橋 敏)、「ロッキン タデイ」(監督: 吉岡和彦)、「梅の壺」に決定した。

第6回授賞式(1月24日午後、東京の六本木オリベホールで開催)の冒頭に同振興基金信託・運営委員会委員長の羽佐間重彰氏が「この基金は、角川会長が100億円というお金を出版文化に使って欲しいということが始まった。そして、映像部門でも若い人を育てようということ、シネマ・インベストメントの原(正人・会長)さんや、角川映画の黒井(和男・社長)さんなどと一緒に、いま日本で求められているのは作品を作り出す最初の根源となるプロデューサーなのだということ、プロデューサーの発掘と育成を目的にはじめた。6回目ですが、第79回キネマ旬報ベスト・テンを見ていると、その中に「カナリア」と「リンダ リンダ リンダ」が入るくらいこの賞で応援した作品が評価されているというところは素晴らしい。今日受賞される方々も是非ともいい作品を作り、世の中に訴えるようなものを作って頂きたい」と挨拶し、受賞者に表彰状を授与。

続いて、角川文化振興財団理事の篠田正浩監督が「先程、羽佐間



羽佐間委員長



一角川理事長

委員長から、作品を作り始めるプロダクションのプロデューサーが映画の一番重要な役割を担うと言った話があったが、私が監督としてずっと通ってきて、プロデューサーほど嫌なものはないと思っていた(笑)。ところが私どもが考えていたプロデューサーというのは、映画会社という資本主義のカチカチだったんですね。でも、いまエンジェル、天使が舞い降りてきて、100億円もお金出して好きな映画撮れなんて言う、この資本主義の世の中でそんなことは滅多に起きないこと。ここで何度も挨拶させてもらっているが、コンペを通った企画を読んでいると、昔の映画会社なら一つも通らないものばかりだなと(笑)。この受賞で前途優位と思われているかも

「計画」というものが発表されて、東京芸術大学が映画専門の分校を作って、今60数名の学生諸君が勉強に励んでいる。この財団からも年2千万円の製作資金を提供しており、学生諸君が私の話も非常に熱心に聞いてくれた。夏の課題として素晴らしい作品も残っていて、ここでも新しい若者たちが生まれてきていることを嬉しく思っています。私はそこで学生諸君が卒業する時にエンジェル大賞に応募して欲しいと呼び掛けてきた。ですからプロデューサー志望の諸君たちは、学生とも競争しなければいけない。でも、競争は厳しくなるが、私は非常にいいことだと感じている。活躍する日本映画の中で、新しい監督が育ってきたなど見ている。また、私は東京国際映画祭のチエアマンをしながらそれを強く感じている。そういう中で本当の意味での競争が始まって欲しい。ようやくそういう土俵を映画界も準備できるようになった。いい作品で尚且つ興行的にも成功する作品が生まれてくるように期待している」と挨拶した。

### 入口に立った者たち

応募総数11実写102企画、アニメ7企画の中から選ばれた今回の受賞者は、CM制作のプロデューサー、版權ビジネスなどを手掛けてきた者、書籍編集・作家のエンジニア、TV番組製作者、そしてNHK大河ドラマ担当など即戦力として期待される面々が揃った。彼らに受賞の喜びと共に、日本映画界をどのように見ているのか、そして目指すものについて聞いた。映画製作の入口に立ったばかりの彼らだが、その正直な意見の中には映画界をさらに活性化させるヒントが隠されている。

—まずは受賞の感想を。

**柿本** まったく受賞を期待する立場ではなかったのが本当に驚いている。30年以上CMの仕事をしてきたが、映画の世界では新人なので、いまいろんな方々と必死に映画ビジネスについて走りながら勉強しつつ、進み始めたところで。オノ 皆様にご感謝という気持ちがある。ご縁があったという賞を頂いたので、私自身この賞の価値

しれないが、映画は世間に出たら新人だろうが、ベテランだろうが世間は容赦なく作品としてしか受け止めます。前途優位なんていう言葉に甘えないで、もう出したら勝負ということだから、プロデューサー、タッグを組んだスタッフの皆さんはこれからもそういう覚悟で生き続けてもらいたいと心から願っている。とにかく受賞されて非常にラッキーな皆さんに心から祝福申し上げます」とエールを送り、賞金目録を授与(大賞100万円、入選50万円)、それを受けて各受賞者が受賞の喜び、今後の抱負を語った。

授賞式に続いて開かれたレセプション・パーティーで、同振興基金信託委託者で同財団の角川歴彦理事長が乾杯の音頭をとり、今回受賞された方々は製作の入口に立っているの、どうか期待に応えて頑張ってください。このエンジェル大賞から生まれた作品がキレメ旬報はじめ、いろいろなメディアで紹介され、実際に興行でも実績を上げつつあるということ、嬉しい。そして何よりもここ1、

2年、日本映画の復権ということ、ハリウッド映画への逆襲が始まったその役割の一端をこのエンジェル大賞も果たしているという自負もある。今から9年前に私は「実業園」という映画を原(正人)さんにプロデュースをお願いして製作したが、その時に大成功の中で、東映の岡田(茂)相談役(現在)に「日本映画は復権、復活しますね」とお話ししたら、「そんなに甘くないよ」と言われ、日本映画はこのままでいいはずはないと思った。そういう思いから、基金の中から映画にも応援するということを羽佐間さんをお願いして、このように実現することが出来たので、受賞者の皆さんには立派な作品を世に送り出して頂きたい。また、政府からも「知的財産推進

大 賞

受賞者名	企画名	略 歴	あらすじ	キャッチコピー
柿本秀二	「扉抜けども、悲しみの愛を見せる」 (原作:本谷有希子[講談社])	CM制作会社でプロデューサーとして活躍し、ACCグランプリなど数々の賞を受賞。01年よりショートフィルムの制作を手掛ける	自己愛過剰の女優志願の女の人格崩壊の恐怖と再生の物語	“なにものにもなれないあなたの物語”

入 選

オノコースケ	「闘茶」	1963年生。東宝で劇場販売関連事業に関わり、退社後に版權ビジネスを手掛け成功させる。米映画のアソシエイトPとしてプリプロ中。05年俳ビクニックと契約。本作は初プロデュース作品	茶をめぐる暴力、魅惑、打算、悟りに関する物語	“茶の本質は、単に湯を沸かし茶を点てる事にある。(王也氏)”
柴田 雅	「東京即売会襲撃!!」 (仮題) (原作:川上亮)	1975年生。99年に角川書店入社し、富士見事業部でライトノベル系書籍の編集を担当。04年退社後、株式会社オーエンタテインメントで、作家のエージェント業務を行いながら企画開発・プロデュースを開始	様々な人間の思惑が交差する、一日だけの青春群像アクション	“あの夏、世界で一番アツイ場所で、サイターの一日が始まった”
高瀬 敦	「ロックン ダディ」	1970年生。94年に番組制作会社株式会社マックスコムに入社。ドラマ、PVなど多様なTV番組の演出を経てフリーに。TV番組のプロデュースを中心に活動中で、本作が初の劇場映画プロデュース作品となる	中年オヤジたちがロックバンドを結成し、失った大切なモノを取り戻す	“おやジバンド狂想曲”
吉岡和彦	「梅の蕾」 (原作:吉村昭 [文春文庫])	松竹第一興行に所属し、映画製作に携わる。NHKエンタープライズ21(現NHKエンタープライズ)入社後、「カラフル」などの映画をプロデュース。大河ドラマ「新撰組!!」をサブデスクとして担当	人と人のつながりがいかに大事かを痛感させるヒューマンストーリー	“天国へ「ありがとぅ…」”



→ 柿本氏

値を高めた。元々、私は映画が大好きで、アート志向は強い。だが、クオリティはもちろんだが、やはりこれからは映画ビジネスについて成功させることが出来るプロデューサーとしてやっていきたい。まず、「闘茶」という作品を完成させることが先決。これは日本と台湾の合作だが、今後は日本と他の国との合作映画を中心に手掛け、映画を通して国際交流というものを進めていけるプロデューサーになっていけたらと思う。

柴田 ずつと書籍の編集をやってきて、コンテンツが生まれていく中で、映像になったり、様々なメディアに転用されていくことが、昨今のメディアミックス展開で普通になってきていると思うが、特に映画に縛られる立場ではなく、クリエーターに近いところで、現在は作家のエージェントをやっている。作家のエージェントをやっているなかで、今回は非常に運良くこのような賞を頂き、いま小説は出来上がっていて、さらに脚本も準備稿まで上がっている。この作品をどういう風にメディア展開していくかが、この賞のためにも私に課された使命だと思うので、きっちり売り抜いていきたい。

高瀬 ずつとテレビをやってきたが、企画に賞を貰えるという今回の受賞は画期的だと思う。僕のような海外漢にも頂けて、感謝している。ようやく入口に立てた。ずつと映画をやりたくてしようがなくて、何も知らずにテレビの世界に入ったから、以外に映画との接点がないのを知った。

吉岡 僕がやりたいのは東北における「みちのくプロレス」の映画版。みちのくプロレスって東北だけで巡業していますよね。あれの映画版のシステムを作りたいという提案を今回させて頂いた。だから作品の内容とかストーリーの面白さではなく、東北に於けるみち

のくプロレスの映画版をどう実現するか、のトライアルになる。面白いと思ってくたさる興行主の方々、スポンサーの企業の方々がいらしたら、まず声をあげて頂きたい。一緒にやってくれる方を募りたい。

柿本 原作があるので、その世界観を面白いと思ってスタートした。その面白いと思っている部分を、もっと原作以上に映画的にエンターテインメントに仕上げていくことが課題。狙いとしては、映画界に新しい風を吹かす事が出来たらと思う。

オノ お茶というのが一つのテーマ。お茶はこの国に行ってもある。「愛・地球博」という万博に昨年行ったが、どこのパビリオンに行ってもおみやげでお茶が完



→ 高瀬氏

っている。たまたまそういう状況の時に、台湾の監督が持っていた企画で、お茶をテーマにやれば面白いのではないだろうかと思った。お茶というのは非常に平凡ではあるが、歴史もあり、様々な使われ方もしている。習慣、文化によっては「茶禅」という文化がある。

それぐらいお茶というのは深いもの。お茶をテーマに面白い映画を作っていければと思っている。

**柴田** 単純に確実に売れる、パイが見えているところはどこかを考えて企画を立てた。コミケ（コミックマーケット）という50万人の若者たちが、自分の作った作品を持ち寄って集まる会場を舞台にして、そこで繰り広げられるクラムサスペンスということに今しているが、とにかく自分がずっと



→柴田氏

編集をやってきて、物を売るときにターゲットを何に置くかが一番大事と考えている。今回は売るためにターゲットを絞り、同時にそれだけでは非常に狭いターゲットになってしまうので、それをいかに一般にまで届けられるかを試行錯誤しながらやっている。

**高瀬** 昨年の4月にTV番組でオヤジバンドをテーマにした20分の特集を作ってみたら受けが良かったのと、数字が獲れたから。中高年が自分の生活をもう一回見直すという部分で、バンドを大事に思っている人たちがいる。定年した時にバンドをもう一回始めるといのが、一つのブームとしてあるのだから。それはその世代だけではなく、他にもいたから視聴率も取れたのだろうと思いい、映画のテーマになるのではないかと応募した。

**吉岡** いまケータイとかネットで見られる時代になって、劇場からどんどん離れていく方向に世の中流れているが、むしろ僕が考えているのは、映画館という劇場よりも身近な生活圏にある公民館と



→吉岡氏

かホールに足を運んでスクリーンに投影される物語を楽しむという、かなりアナログ的な方向にお客さんを誘いたい。全く世の中と逆行した企画として、興行という意味で考えている。狙いはそこ。一緒に集まって映画館じゃないところでもその時間を楽しみ、共有できるといことを提案したい。僕が考えたそのスキームというのが、実はある大きな資本があれば実現できるかもしれない。でも、僕が今回応募した理由というのは、お金が欲しいからではなくて、こういうスキームで新しい公開方法を作っていくことに、どれだけプロの人が賛同してくれるのだろうというものがきっかけ。だから今日受賞して、こういうやり方を指すことが面白いぞと言っていた

かホールに足を運んでスクリーンに投影される物語を楽しむという、かなりアナログ的な方向にお客さんを誘いたい。全く世の中と逆行した企画として、興行という意味で考えている。狙いはそこ。一緒に集まって映画館じゃないところでもその時間を楽しみ、共有できるといことを提案したい。僕が考えたそのスキームというのが、実はある大きな資本があれば実現できるかもしれない。でも、僕が今回応募した理由というのは、お金が欲しいからではなくて、こういうスキームで新しい公開方法を作っていくことに、どれだけプロの人が賛同してくれるのだろうというものがきっかけ。だから今日受賞して、こういうやり方を指すことが面白いぞと言っていた

けたことが財産になった。  
—今まで似たような試みが成功しなかったのはなぜでしょう。  
吉岡 まず届け過ぎだったのではないか。全国各地の公民館とはじめてしまった。もっとターゲットを絞ったところを狙えばよかったのではないか。それと結局政治的な勢力も影響したのではないか。でも、実際に公民館にハコがある、かけられるような要素があるのだから、どうボタンをかけていけばいいのかをやりたい。そのためにはコンテンツがないと駄目なので、コンテンツの提案はしたが、そこを是非みなさんと一緒に考えていきたい。それは今回の試みではなくて、実際にそれがシステムとしてまわれれば、そこで配給する映画も出てくるし、もっと今夕ブついている日本映画をいろんなところで公開できる可能性が生まれるので、是非お知恵を頂きたい。これまでは恐らくそこに住んでいる人々をつかんでいないからではないでしょうか。人に訴えかけるものは何かというところに目を向けていかなければならない。失敗

したら笑ってください。でもトライします。  
**日本映画界の現状とは**  
—映画館へはよく行きますか。  
柿本 凄く熱心に映画館に通ってはいませんが、近くにシネコンも出来たので、割と最近足を運ぶようになった。ハリウッドの映画も好きだが、日本映画もどっかで見たいと思う。DVDでも見られるが、劇場でお客さんがどういう顔で見ているのか、自分でも見ておきたい。  
オノ 私も行きますが、私はもともと東宝という会社について、辞めてから映画って高いと思うようになった。いち映画ファンに戻った時に、1800円は高いなという意識が非常に強くて、いち家族



→オノ氏

## 日本映画エンジェル大賞

角川出版映像事業振興基金信託における映像コンテンツ事業に対する出資の一環として創設され、以下の賞金と映像支援が受けられるもの。

- ▼賞金が提供され、企画開発費(ビジネスプラン策定費)が出資される。
- ▼受賞作品に基づいて開発されたビジネスプランは、シネマ・インヴェストメントが運営するインディペンデント・フィルム・ファンド(IFF)に審査され、合格した場合にはIFFの投資対象となる。その場合は、事業費の一部の出資を受けることが出来る。
- ▼基金出資分に対応する著作権は、プロデューサーに帰属。
- ▼利益が出た場合には、成功報酬が認められる。

## 角川出版映像事業振興基金信託

平成12年4月に角川歴彦氏(角川ホールディングス代表取締役会長兼C.E.O)が出版関連事業の発展を願い、出版文化に寄与することを目的に私財100億円を拠出して、三菱信託銀行との間で設定した。同基金信託では、平成14年7月に「優れた映像コンテンツの開発援助」「次世代の映像プロデューサーの発掘及び育成」「国際的に通用する映像コンテンツの開発援助」「新しい資金調達方法などの映像コンテンツビジネスのための日本型ビジネスモデルの創造」を目的に、新たに映像コンテンツを出資対象とした。

として子ども達を連れて行くと、一回ですぐに一万円が飛んでしまふ。ただ、どちらかという自分として見る映画もあれば、親として子供を連れて行く映画もあるから、シネコンなんかは連れて行く子供に見せている間、自分は違うものを見るということ、他の人もやり始めているから、そういう意味でシネコンのお陰で近くまで来てはいるのは確か。だから「映画の日」とか、高校生3人で

一人千円とか、夫婦割りとか新しいアイデアをもっと出して、映画をお金のことを考えないで見られるような、そういう方向になってくれたらと思っている。

**柴田** よく行く。学生時代は名画館に行きまくっていた。ただ、仕事するようになって、若い人たちの動きを見ていて、映画館に行かなくてもいいのかなというのがある。映画見た後にクラブで踊るみたいなこともやったけど、

なかなか根付かない。だから僕が考えて行きたいのは、どう届けるかという部分で、特に映画館である必要はないのかもしれない。

**高瀬** 映画館は嫌い。身長184センチあるから、狭いんですよ(笑)。肘掛けの取り合いから、自分と違うところでみんなが笑うのも嫌で、なんか家で見ただ方が遙かに快適。タバコも吸うのでそれも苦痛でしょうがない。行くけど、なにせ嫌。高いし。女の子と行く二人で3600円じゃないですか、上映時間2時間、移動時間含めると4、6時間くらいトータルでかかる。6時間は結構な時間じゃないですか。映画館に行くというのは大変。もっと抜本的な改革をしなければならぬのではないかと。このままでは映画館に行く人がいなくなってしまうのではないかと思う。行きたいんですけどね。

**吉岡** 映画館に行けなくしているような気がする。もちろん、高瀬さんと同じような思いはしている。今の流れがDVDの販売だとか、コンテンツの切り売りだとか、つまり映画館に行かなくてもすぐに見られる状態になっている。かつて深作欣二監督の「いつかキラギラする日」(92年)が当分ビデオになりませんという言い方をした。そうすると映画館に行かざるを得ない状態を作った。ああいうことをやって映画館にお客さんを誘導していた動きとは逆の方向に全部発展している。そこにいかなければ見られないものという状態を限りなく潰して商売しているような気がする。かつて薬師丸ひろ子さんを見るには映画館に行つて見るしかなかった。そういう環境整備が逆へ行っている。映画館自体の成り立ちとか、増設という問題、お金の問題はありますが、作り手側、売り手側が早く回収しようと思つて、映画館に行かせなくさせているのではないかと。

—では、日本映画の現在のクオリティをどのように捉えているか。  
**柿本** 映画を作っていく中で、何十年間か技術革新というのはなかったが、最近HD撮影とか、あそこら変が一つ流通も含めて、変わって行くのではないかと。じゃあ見る側としてフィルムとどう違うのかということに関して関心を持っている。  
**オノ** 日本映画は沢山作られているが、ヒットしているのはホラーなど非常に限られたジャンル。海外でもジャパニーズ・ホラーくらい。クオリティ的には相米慎二監督が作っていた頃と比べて、技術的なものは格段と上がっていると思うが、映画としていいかと言った時に逆にそうは変わっていないのではないか。昔は作家主義だとか、娯楽作品と芸術作品とはつきり分かれていたけど、いま中間的なものが増えてきている。私が日本映画に関してやっていくこととは、どちらかという日本人をターゲットにするのではなく、世界に向けて売って行きたいと思つているから、英語で撮らなくては行けないのではないか。ホラーに関しては見えていくからので、別に日本語でもわかるんでしようが、ホラー以外の映画ではどうしても言語が障害になってくると思う。日本人は日本語を使うというのも大事だけど、やはり英語で映画を撮る人間がこれから現れてこ

日本映画エンジェル大賞 受賞一覧

<p>第1回 長松谷太郎「ROBO-ROBO」 根岸 洋之「リンダリンダリンダ」 （「ブルハザウルス17」を改題） 野間 清恵「シナリオ〜昨日はよく眠れましたか？」</p>
<p>第2回 臼井 正明「カーテンコール」 河原一久・鈴木勲「ミッドナイトイーグル」 松田 広子「カナリア」 宮園訪香子「シネメイロ」</p>
<p>第3回 〈大賞〉 森岡 利行「路地裏の優しい猫」 榎本 憲男「壁と笑いの夜（仮）」 〈佳作〉 亀田 裕子 「BLINDED BY THE LIGHT〜まぶしくて見えない〜」 望月 徹「アカベラ」</p>
<p>第4回 〈佳作〉 今川千佳夫・松村傑 「ネガティブハッピー・チェーンソーエッジ」 新井 直子「全然大丈夫」 高階者清光「夢の力」 申間美千恵「ギャストリーストーリーズ」</p>
<p>第5回 〈入選〉 堀田 尚志 ※企画の事情により公表せず 江面 貴亮 ※企画の事情により公表せず 深川 栄洋「水の中のホームベース」 深作 健太「エルの乱（仮題）」</p>

高瀬 クオリティというのとは全く違うので、何を基準にクオリティを語るかで全然違ってくると思う。出資者にとってはクオリティが高いというのは儲けてくれた方がいいわけで、作家にとっては自分がやりたいと思ったものを出来る限り形にする。プロデューサーの立場から考えると、それだけの作家性がその人にあるのかというのを非常にシビアな目で判断しな

ないかと思っっている。それには日本人ばかりが英語しゃべってもしょうがないので、その日本で外国人がなにかやる映画だとか、そういった企画をいくつか考えている。

高瀬 クオリティは上がっていると思うが、ただ僕が気になるのはやはりインフラの方かな。映画館の数が少ない中で、凄いなが作られていて、1000本も2000本もあふれている状態。そっこの整備をした方がいいのではないかな。それだけクオリティの問題はあるだろうが、まわりの話を聞いていると、「俺だってあんな作品作りたくなかった」なんていう話を聞くから、クオリティの話はとても出来な。最初に描いた絵図とはまったく違うものになってしまっている。それはよくあることなので、そっこの方も含めて製作体制とか、出口の問題などの整備が出来てくると、自ずと本来作ろうと思っ

たクオリティのものが作れるようになってくるのではないかな。吉岡 言葉で過剰につなぐ映画を作り始めた頃から、日本人が「画でつなぐ」という映画を見る習慣を失ってしまったのではないかなと思う。これは映画というものは画でつなぐものと定義されたわけではないが、ハリウッド映画でやっているようなシステムチックに音でつなぐっていくドラマ、クオリティの高いテンポのあるものというよりは、日本文化の一番いい表現方法は画でつなぐことを楽しめるような映画だと思っっている。個人的には「蒲田行進曲」が大好きだが、その先にはスピルバーグが何億億もかけて作るものに行き着かざるを得ない。でも、僕はキム・ギドク監督の「春夏秋冬そして春」のような画でつなぐものに日本映画のクオリティを委ねて

いけないと消滅すると思う。

以上、受賞者からは忌憚ない意見が出された。それはこれから自らが手掛けていく作品に託す思い

<p>「カナリア」 (第2回受賞作品) DVD発売中</p>	<p>第79回キネマ旬報ベスト・テン 2005年度日本映画ベスト・テン7位 第48回朝日ベスト・テン映画祭 日本映画 4位 第13回レイダンス映画祭(ロンドン) グランプリ受賞 第60回毎日映画コンクール・スポニチグランプリ新人賞(石田法嗣) 第20回高崎映画祭 最優秀新人女優賞(谷村美月)</p>
<p>「リンダリンダリンダ」 (第1回受賞作品) DVD発売中</p>	<p>第79回キネマ旬報ベスト・テン 2005年度日本映画ベスト・テン6位 読者選出日本映画ベスト・テン3位 第48回朝日ベスト・テン映画祭 日本映画 3位 映画芸術 2005年度日本映画ベスト・テン 第1位 第29回山路ふみ子 新人女優賞(香椎由宇)</p>
<p>「カーテンコール」 (第2回受賞作品) 全国順次公開中</p>	<p>第79回キネマ旬報ベスト・テン 2005年度読者選出日本映画ベスト・テン8位</p>

もあつてのことだろう。この時に述べた思いを曲げずに新しい日本映画を生み出して欲しい。

「日本映画エンジェル大賞」は昨年、3本の受賞作品を公開した。各映画賞を受賞するなど3本とも高い評価を受けただけでなく、興行的にも結果を出した。続く作品が日本映画界に更なる新しい風を送り込むことを期待したい。